在原業平の歌二首 ―在原業平の古画にそえて―

髙城弘一（竹苞）
Koichi (Chikuho) Takashiro

この数年、江戸期に描かれたと思しき、古い歌仙絵にその歌仙の詠歌を書き組み合わせて、一つの作品となりうるような創作活動を行っている。本誌『大東書道研究』（大東文化大学書道研究所発行）において発表した拙作は、以下の通りである。

●「坂上是則の歌三首」（第二十号、平成二十五年三月）
●「斎宮女御の歌二首 ―斎宮女御の古画にそえて―」（第二十二号、平成二十七年三月）
●「小野小町の歌二首 ―小野小町の古画にそえて―」（第二十三号、平成二十八年三月）
●「藤原興風の歌三首 ―藤原興風の古画にそえて―」（第二十四号、平成二十九年三月）

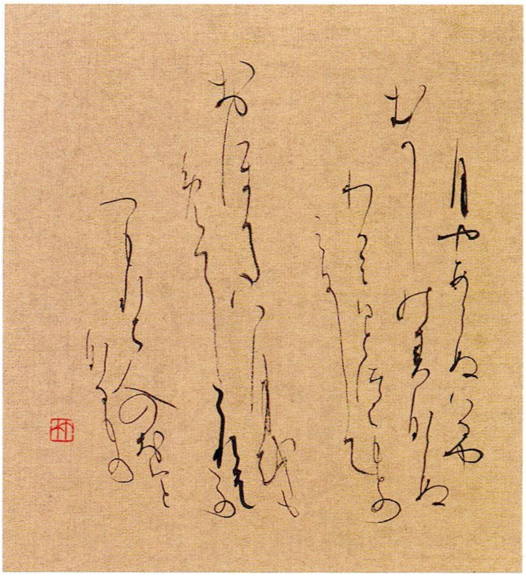
また、大東文化大学発行（同書道研究所編集）のカレンダーでも、以下のように、同様の拙作を提供している。

●「源順の歌一首 ―源順の古画に―」（平成三十年）
●「小野小町の歌一首 ―小野小町の古画に―」（平成三十一年）

近時、江戸初期に描かれた、三十六歌仙の歌仙絵およびその歌仙の歌が書かれた色紙（屏風崩し）を落手。三十六組揃いではなく、状態も思わしくないものが多いので、今回、在原業平の歌仙絵のみを使用した。歌は『古今和歌集』仮名序の業平歌三首より二首を選出した。

潤渇・太細の変化はもちろん、行間や行の流れの変化もつけ、余白の美を創出。小品ながら文字数によって煩くならないようにし、奥行きが出るよう工夫した。今回用の書き下ろし作品である。

料紙は、こきんの染紙本鳥の子紙を使用。焼けている歌仙絵の色調に合わせるため、かなり渋めのものを選択。筆は、鼬毛の面相（攀桂堂製無銘）で、墨は、油煙墨「公」（平成元年古梅園製）を用いた。落款印は、本学大学院書道学専攻博士課程修了・栗躍崇氏刻を使用。



本紙寸法、
各縦12.5×横11.5㎝

【釈文】

月やあらぬは(八)るや
むか(可)しの(能)春な(那)らぬ
わか(可)み(三)ひ(日)とつ(徒)は(者)もとの
み(三)に(爾)して
おほか(可)た(多)は(八)月を(越)も
め(免)てしこれそ
この
つもれは(者)人のおい
とな(那)るもの